

自己理解・他者理解を深めるための特別活動のオンライン授業開発：

「主体的・対話的で深い学び」を目的としたビブリオバトルをベースに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028095

実践（調査）報告

自己理解・他者理解を深めるための特別活動のオンライン授業開発

—「主体的・対話的で深い学び」を目的としたビブリオバトルをベースに—

松尾 由希子（静岡大学 教職センター）

要約：

本研究は、自己理解・他者理解を通じた「人間関係形成」をめざすために、ビブリオバトルをベースに、特別活動論の授業開発を行なった。自己について、本を用いて発表（紹介）する授業である。授業の目的は「人間関係形成」にあるために、ビブリオバトルの公式ルールに一部変更を加えて、発表前のレポート作成やワークシートの記入、ペア及びグループ活動等を含めることで、自己理解・他者理解につなげられるようにした。本研究における受講対象は教職課程の大学生であるが、高等学校等でも実施できるよう学習指導要領をふまえて構成した。なお、この授業はコロナ感染症対応のために、Zoomで実施した。対面時とは異なり、聞く側の反応が伝わりにくいため話しづらいという意見もあったが、雑音が聞こえないため集中できるという意見もあった。問題点について、事前に予測し対応することで補える可能性を見出せた。

キーワード：

特別活動、人間関係形成、カリキュラム、ビブリオバトル、「主体的・対話的で深い学び」

はじめに

本研究の目的は、自己理解・他者理解を通じて、特別活動の教育目標である「人間関係形成」をめざす授業開発にある。授業開発にあたり、2022年から年次進行で実施される高等学校（以降、高校と記す）の特別活動の新学習指導要領（2018年公示）において「充実すべき重要事項の第一」、「各教科等を貫く重要な改善の視点」としてあげられている「言語活動の充実」を考慮した。また、言語活動の質の向上や「主体的学び」「対話的学び」「深い学び」になるよう¹⁾、「主体的・対話的で深い学び」（アク

ティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）の視点を重視した。その結果、言語活動をふまえた人間関係形成の授業として、本の紹介ゲームとして知られるビブリオバトルをベースに開発を進めた。具体的には、自身と本のつながりについて発表するという自己紹介のワークである。ビブリオバトルの意義として、林伸一は1.活字離れとしての対策、2.社会的コミュニケーションの訓練、3.説得力やプレゼンテーション能力を鍛える機会をあげている²⁾。

今日、ビブリオバトルは図書館や企業等のほか、小学校から大学までの学校教育でも実践されており³⁾、筑波大学知識情報・図書館学類では「ビブリオバトル方式の入試」も導入している⁴⁾。ビブリオバトルは2007年に考案され、文部科学省の「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（2013年～2017年）によって学校教育に広がった⁵⁾。学校教育を対象とした先行研究として、中学校国語科⁶⁾及び大学の「国語表現」⁷⁾で行なった実践がある。2つの実践は、コミュニケーション能力の向上を見据えながら、「話す」「聞く」という力を伸ばそうとする。そのため、特に国語力やプレゼンテーションの仕方を重視していると考えられる。

一方で、本研究は「人間関係形成」を重視する特別活動の授業で実施するため、ビブリオバトルのキャッチコピー「人を通じて本を知る、本を通じて人を知る」の中の「人を知る」という点に比重をおきたい。本との出会いや本を通じて自分がどのように変わったか、というように、本は自身について話すためのツールとして考える。考案者の谷口忠大はビブリオバトルの機能として「お互いの理解が深まる」点をあげているが⁸⁾、互いの理解が深まるまでに1回で終わらず積み重ねが必要であるとも述べている⁹⁾。しかし、授業で行なう場合、カリキュラムの問題で繰り返し実施できないことも考

えられる。そのため、本研究では1回の授業でできるだけ効果的に行なえるように考慮した。

なお、ビブリオバトルをベースにした授業（以降、本授業実践と記す）は、中学校・高校の教員免許取得を希望する学生（主に3年生）を対象に、2020年6月18日に教職必修科目「特別活動論」（理学部1クラス35名、人文社会科学部・農学部1クラス20名）で行なった。ビブリオバトルをベースにした授業は、3年前から対面授業において実施してきたが、今年度はコロナ感染症対応のため、web会議サービスとしても知られるZoomを介して実施した。本授業実践は大学生を対象に実施したが、高校等の学校でも実施できるように学習指導要領をふまえて構成している。

1. ビブリオバトルをベースにした「人間関係形成」の授業実践の概要

（1）ビブリオバトルについて

ビブリオバトルの公式ルール¹⁰⁾は、以下のとおりである。

【公式ルール】

- ①発表参加者が、読んで面白いと思った本を持って集まる。
- ②順番に一人5分間で本を紹介する。
- ③それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2~3分行う。
- ④全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

このほか、公式ウェブサイトの中で「公式ルールの詳細」¹¹⁾が示されている。「特別活動論」では自己理解・他者理解を通じた「人間関係形成」の授業開発を目的にしたため、ビブリオバトルをベースにしながら、アレンジを加えた。ただし、上記の【公式ルール】4項目はそのまま実施し、「公式ルールの詳細」について一部変更した。変更点については、（3）に記す。

（2）班の特徴と役割について

①メンバー

1つの班は4~5人のメンバーで、理学部クラスは学科で偏りが無いように、人文社会科学部・農学部クラスは学部や学科で偏りがないように構成した。本授業実践に限らず、「特別活動論」のグループワーク時は同じメンバーで固定している。メンバーは、学部や学科が異なるため、教職課程の授業以外ではほとんど交流がない。

②ペアワークやグループワークを行なう

「特別活動論」の授業において、ペアでの話し合いやディスカッション、グループワークの際は、常に同じメンバーで構成される班で実施する。ペアワークは、グループの中で2人ずつにわかれて行なう¹²⁾。

③アイスブレイクとして、自己紹介を行なう

「特別活動論」では、グループワーク前にアイスブレイクを行なう。本授業実践当日も1人1分の持ち時間で、事前に提示していたテーマ「最近気になること」について話をしてもらった。

④役割を設ける

班メンバーの役割として、司会とタイムキーパーを置いた。タイムキーパーは、アイスブレイクや発表、ワークシート記入等の時間を確認し、司会やメンバーに伝える。教員は5人班を基準として、時間設計をしているため、4人班はタイムキーパーが中心となって、作業時間の調整を行なう。司会は活動が活発になるように配慮し、タイムキーパーはわかりやすく時間を伝えるために紙に残り時間を書いたり、携帯電話のタイマーをZoom画面に映し出したり、おのれので工夫していた。

（3）本授業実践とビブリオバトルの違い

本授業実践は、ビブリオバトルをベースにしているが、変更を加えている。変更箇所についてまとめる。

①事前にレポートを課す

発表内容について事前にレポートを課す点である。公式ウェブサイトには、ビブリオバトルのライズ感を楽しむため、暗黙のルールとして「原稿やレジュメ、スライドを準備しません」と記してある。ただし、レポートは課しているものの、発表当日は

手元に置かないため、読み上げることはない¹³⁾。

なぜ、レポートを課すのか。本授業実践は、本を使って自己紹介を行なうため、「なぜこの本が好きなのか」「この本は自分にどのような影響を与えたか」等、自己理解を必要とする。自身について考えることは、人によって時間を要する。そのため発表前の準備として、レポートを課した。レポートの項目は、(4) ②に記す。

②話す内容について、おおまかな規定を設ける

「公式ルールの詳細」では、「発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる」と示してある以外、発表内容について規定していない。本授業実践は自己紹介という観点で本を選ぶため、面白いと感じた本以外の選択も可能であるが、必ず自身と本の関わりを中心に発表してもらうことにした。

谷口は「本を語ることは、実はそのまま自分自身を紹介していることになる」¹⁴⁾と述べているが、慣れていない段階ではあらすじを中心に述べることもままあるという。ビブリオバトルを繰り返すことと、自然と自身と本の関わりを中心に話していくようになると考えられるが、本授業実践は1回の授業を想定しているため、発表内容をおおまかに規定した。

③質問の視点について規定を設ける

「公式ルールの詳細」において、発表後のディスカッション（本授業実践では、質疑応答としている）は、チャンプ本を選択できるように行なう。一方で、本授業実践では「他者理解を引き出すような質問が望ましい」として、当日司会者が班のメンバーに当日のスケジュールを確認する際にも、質問のポイントについて改めて話してもらった。そのため、実際に出た質問として、「どういうふうにその本に励ましたか」「言葉遊びの面白さを知ることができたと話されたが、今の大学での勉強に生きていることはあるか」「この本で学んだことで、今実践していることはあるか」等、本の内容というより、本の内容と発表者を関連付けてその人について知ろうとする質問が多くあがった。

④ペアやグループへのコメントを出す

2020年度の「特別活動論」では、本授業実践を含めて、班によるプレゼンテーションを3回行な

った。グループ内でペアを作り、プレゼンテーション前に自身が「発表等で気をつけたいこと、向上させたい点」について、2、3点を相手に伝える。その伝えられた点を中心に、ペア双方で相手の状態を観察し、プレゼンテーション後にコメントを出す。ペア活動が終わると、班に戻り学んだことや反省点、良かったこと等について一人一人話していく。

ペアワークの目的は、授業を通じた資質能力形成の過程について、自己と他者の視点で評価する点にある。特に小学校から高校の学校教育において、教員は結果だけでなく、結果に至る過程も丁寧に指導する。高校教員から「結果だけでなく、資質能力を習得するまでの過程も重要である」という助言を受け、ペアワークを含めた。受講生は「発表等で気をつけたいこと、向上させたい点」を記述することで、自身の課題について自覚できる（自己理解）。それをふまえて、プレゼンテーションを実行し、その後ペアの相手から評価を受けるようにした。他者評価をする際もワークシートに記述する（他者理解）。記述する時や口頭で伝える際、受講生は建設的な内容や言葉を選ぶよう考慮している。

さらに、班でもディスカッションを行なう。そこでは活動の成果や今後に向けた改善点について話すため、主体的によりよい活動をめざすことができる。このようなやり取りをくりかえすことで、自己理解・他者理解を通じた人間関係形成につながるように考慮した。

⑤Zoomを介した実践

ビブリオバトルは対面で行なうゲームであるが、2020年度前期はZoomで実施した。

昨年度まで対面で行なった際には、事前の準備としてレポート作成を勧めるが課してこなかった。それは公式ルールに存在しないことと準備不足や緊張により、思ったように発表できない受講生もいるものの、班のメンバーのサポートにより5分の発表時間を終えていたためである。しかし対面でない場合、メンバーのサポートがどこまで可能であるか、判断できなかつたため、(3) ①の理由に加えて、事前の準備として全員にレポートを課することにした。

(4) 授業実践の構成

① 当日の発表の流れ

(i) 司会者の説明

「ビブリオバトルの進め方」(前の週に配布)を使い、発表やワークシートの記入等のスケジュールについて司会者から班のメンバーに説明する。

(5分程度)

(ii) アイスブレイクを兼ねた自己紹介 (1人1分)

(iii) 発表 (1人5分)

(iv) ワークシートに質問を書く。(1人1分)

(v) 発表に対する質疑応答 (3分程度)

(vi) 1番読みたくなったチャンプ本の発表 (2分程度)

(vii) ワークシートにペアへのコメント及び班に対する感想を書く。(5分程度)

(viii) ペアの相手にコメントを出す (ペアワーク)

(5分程度)

(ix) 班で本日の感想をシェアする。(グループワーク) (5分程度)

なお、(ii)から(v)は、人数分行なう。

② 受講生の事前の準備

(3) ①に記したように、受講生は発表前までに、レポートを作成した。レポートの項目は、1.本の出典、2.あらすじ、3.自己紹介という観点で内容をまとめ、という3点である。記述を苦手とする受講生もいるため、実際に記述例を示した。

③ Zoomでの実施に際しての注意点

本授業実践時はZoomを使い始めたばかりであったため、利点や弱点をほとんど理解していなかった。ただし、聞く側の反応が発表者に伝わりにくい可能性について、受講生から指摘があった。そのため、班によっては発表日までに対応しようとしていた。

2. 高校学習指導要領における本授業実践の位置づけ

ここでは、特別活動の高校学習指導要領(以降、「本文」と記す)及び解説(以降、「解説」と記す)を用いて¹⁵⁾、学習指導要領における本授業実践の位置づけを示す。

(1) 特別活動の目標との関わり—「人間関係形成」

高校の特別活動はホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の3つの内容で構成されている。この3つの内容を統括する目標について、「解説」では「特別活動は、『集団や社会の形成者としての見方・考え方』を働きながら、『様々な集団活動に自主的・実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する』ことを通して、資質・能力を育むことを目指す教育活動」¹⁶⁾と述べている。

本授業実践の目的である「人間関係形成」は、特別活動で育成する資質能力の学習過程で重要な意味をもつという¹⁷⁾。「解説」によると、「人間関係形成」¹⁸⁾に必要な資質・能力は、個人間や個人・集団間で育まれる。その中で、属性や意見等のさまざまな違いを理解したうえで互いの良さを活かす人間関係をめざしている。

(2) 特別活動における「主体的・対話的で深い学び」との関わり

新学習指導要領では生徒の資質・能力の育成のために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を求めている。「主体的・対話的で深い学び」は、アクティブラーニングという言葉でも知られている。

「解説」によると、「対話的で深い学びの実現」とは、「生徒相互の協働……先哲の考え方や資料等を手掛かりに……自己の考え方を協働的に広げ深めていくこと」と述べられている¹⁹⁾。また、「対話的な学び」によって、クラスの生徒間だけでなく、異年齢の人等多様な他者との交流を通して自身の考えを広げたり、自分の良さに気づけたりするようになるという。

本授業実践は、クラスの生徒間での実施を想定しているが、すでにビブリオバトルは学校外において多様な他者の間で行なわれており、同様に本授業実践も学校内外の他者とともにに行なうことが可能だろう。

(3) 特別活動で育成をめざす資質・能力との関わり

特別活動で育成をめざす資質・能力は種々考えられるが、本授業実践との関連をふまえて、①「知

識・技能」、②「思考力・判断力・表現力等」、③「学びに向かう力・人間性等」の内容を具体的にあげる。

①「知識・技能(何を知っているか、何ができるか)」

「知識・技能」の能力について、「本文」では「(1)多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。」²⁰⁾と述べている。この点について、「解説」ではチームワークの重要性や役割分担の意義の理解を具体的に説明する。

本授業実践では、多様な他者との人間関係をよりよく形成するために、司会等の役割を分担し、充実した活動になるように設計している。班の中で目標を設定し、授業の成果や反省について班のメンバー間で共有する。

②「思考力・判断力・表現力等(知っていること、できることをどう使うか)」

「思考力・判断力・表現力等」の能力について、「本文」では「集団や自己の生活、人間関係の課題を見出し、解決するために話し合い、合意形成をはかったり、意思決定したりすることができるようになる。」²¹⁾と述べている。この点について、「解説」は、集団活動を通じたよりよい人間関係の構築のために「多様な場面で、自分と異なる考え方や立場にある多様な他者を尊重し、認め合いながら、支えあったり補い合ったりして、協働していく」態度をめざしている。

本授業実践では、事前のレポートや発表等を通じて自己理解を深める一方で、発表や他者を観察し良さを伝える等の活動を通じて、自己とは異なる他者の理解もめざす。このように多様な他者を知る実践を重ねることで、他者の尊重につながり、互いの協働のもと活動していくと考える。

③「学びに向かう力・人間性等(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)」

「学びに向かう力・人間性等」の能力について、「本文」では「自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、主体的に集団や社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。」²²⁾と述べている。このような態度を養えるように、

「解説」では「多様な他者の価値観や個性を受け入れ、助け合ったり協力し合ったり、新たな環境のもとで人間関係を築こうとする態度」²³⁾の育成が必要であるという。

本授業実践は、他者の価値観について知ることも重視している。また、他者の価値観を認識すると同時に、他者と自己の違いもあきらかになるだろう。役割について分担することで協力しながら進められる。本授業実践のみで、他者を「受け入れ」る段階まで到達しないが、他者の価値観を認識することは「多様な他者の価値観や個性を受け入れ」るベースになるものであり、他の活動と組み合わせることで目標を達成できると考えられる。

(4) 教員に求められる指導、助言

本授業実践は、クラスを想定しているためホームルーム活動になる。ホームルーム活動における教員の指導について、「解説」によると集団への適応や対人関係に困難を抱えてきた生徒に対する配慮を求めている²⁴⁾。

本授業実践ではペアワークやグループワークの場において、人を否定するような言動を避けて、建設的な言い方にするよう求めている。一方で、配慮をしても自身や他者の心情にふれる本授業実践への参加が難しいと考える生徒の存在も予想できるため、個人の状況に合わせた対応も必要になる。

3. 受講生のコメントによる本授業実践の評価と改善

本授業実践において、受講生は発表後にワークシート²⁵⁾に記入する。ワークシートの項目の「ペアの相手へのコメント」及び「感想」から、本授業実践の評価と課題について考察する。

(1) 「ペアの相手へのコメント」による評価と改善

この項目は他者への評価をコメントとして記述するため、他者理解につながるものである。また、コメントを受ける側にとって、他者を通じた自己理解につながる。

① 評価

1つに、発表する態度である。最も多かった内容

として、発表者は、聞く側が聞き取りやすいよう意識していた。具体的には、話すスピードや声量に言及した人が多く、「語りかけるような」「話し出す際の工夫」をしていたというコメントもみられた。

2つに、聞く側としての態度である。最も多かったのは、発表者への質問に関する内容である。例をあげると「話を広げられるような質問に加えて、紹介した本を読むきっかけなど、相手のことをより理解しようとする質問ができていてよかったです」等である。他者理解や話題を広げられるスキルや態度に対して評価が多い。また、あいづちを打つ等、発表しやすい雰囲気づくりを作っていた点も評価していた。

3つに、発表内容の構成である。聞いている人が理解しやすいように、自身を表現できるように体験や心情と結びつけて本を紹介した点について評価した。

4つに、司会者やタイムキーパーの役割である。司会者やタイムキーパーが工夫して時間の管理を行なった点以外に、「全体の雰囲気をとてもよくしてくれて、話しやすかった」というように雰囲気づくりに関わったことについての評価もみられた。

ほとんどの受講生がペアの相手へのコメントを詳細に記述していた。ペアワークは特定の人に焦点をあてて、その人の良さ等を認識する機会になる。また、記述内容は相手に口頭で伝わるため、コメントを受ける側にとっては他者を通じた自己理解になる。ペアワークは自己理解・他者理解につながる方法である。

②改善

改善すべき点として最も多かったのが発表のスキルや態度である。「自信がなさそうな雰囲気がみうけられた。とても興味をひかれる内容だったので、もう少し自信をもって発表するとよりよい発表になると思う」「流暢な語り方でよかったです。強調したいところをひきつけられるともっと良いと思う」等、受講生のほとんどが、評価の後に改善点を具体的に提案している。ペアの相手にどのような順番で伝えるか、という配慮及びペアの相手が今後の改善につなげられるような「建設的な内容」への意識もうかがえる。

(2) 「感想」にみる受講生の評価と改善

「感想」には、自身が習得できた点やできなかつた点、班の雰囲気や今後に向けた改善点、本授業実践の感想が記されている。したがって、受講生にとって、自己理解・他者理解につながり、また、教員をめざす者として、「人間関係形成」をめざす授業実践への評価という視点もみられた。

①評価

(i) 受講生自身について

1つに、本授業実践によって、多くの受講生がプレゼンテーションや自己理解及び他者理解について、向上したと自覚していた。例えば「プレゼンの内容を練る時に、言いたいことを簡潔に伝えるための文章力、自己理解の力がついた」というコメントがみられた。

2つに、自身の発表の不十分さを自覚する人も一定数みられた。ビブリオバトルは経験を積み重ねるほど、プレゼンテーション力があがるといわれる。受講生のほとんどが本授業実践で初めてのビブリオバトルを経験した。課題は改善につながるものであり、次のプレゼンテーション時にいかせるだろう。

3つに、自己と他者で捉え方が異なることに気づいた人もいた。「発表後、自分が思う『自分』と相手がみて感じている『自分』との差が意外にあった」等のコメントにみることができる。本授業実践のペアワークは自己理解と他者理解が必ずしも同じではないことを認識し、自己理解の修正をはかる機会になる。

(ii) 班について

多くの受講生が所属する班について、肯定的に評価した。メンバーが発表を聞く際に笑顔やあいづちで発表しやすい雰囲気を作っていたことや時間等のルールを守っていたことについて記していた。

そのほか、発表者へのフォローについて記したコメントもあった。「事前に内容をまとめたり、本を準備したりしたのに、本番では緊張してしまって頭が真っ白になって何を話したかったのか、わからなくなってしまうことがあった。しかし聞く側の人が笑顔で接してくれたのでなんとか自分の言いたかったことを言うことができた」というよ

うに、昨年度まで対面でみられた班のメンバーによるフォローがみられた。

班のメンバーはアイスブレイクや打ち合わせの機会を通して、発表前までに良い雰囲気をつくろうとしていたことがうかがえる。アイスブレイクについては「どんな人か、前もって知ることができて話しやすくなった」というコメントもみられた。また、班によっては、本授業実践前は「丁寧語で話していたけれど、終わるころには『ため口』で自然に話せた」ことをあげて、短時間で親しくなれる可能性について記していた。

(iii) 「人間関係形成」としての本授業実践の有効性

感想の中で最も多く記述された内容である。

1つに、他者理解としての有効性である。「ビブリオバトルを行なったことで、その発表者がどのような心情でその本を選んだのか。または興味を持っているのかを知ることができた。他者理解につながった」というコメントがみられた。

2つに、自己理解としての有効性である。「ビブリオバトルなのに、発表者の考え方や人となりがわかり、普通の自己紹介よりもしっかり自己紹介として成り立っていて面白かった」「就活が近づいてきている中、自己分析に苦しんでいる人たちにとって、ビブリオバトルは自己をふりかえる良い機会になるのではと感じた」というコメントがみられた。

3つに、自己紹介としての有効性である。「単なる作品の紹介だけでなく、紹介する人の人生や性格についても交えて紹介されていたため、作品とともに紹介する人にも興味をもつことができ、おもしろかった」というコメントがみられた。

以上より、本授業実践について受講生は「人間関係形成」の面で有効であるととらえていた。そのほか、本授業実践と読書感想文の違いについて記した人もいた。初め、双方は似ていると感じていたが「自身の感じたこと及ぼした影響についての比重が多く、発表後は本にも発表者自身への興味や理解が深まるものだった」と分析している。読書感想文に適切とされる内容は判然としないが、児童の「読書感想文が好きでない理由」について調査した天野未来・鈴木貴文によると、読書は好きであるにも関わらず、読書感想文を苦手とする理由に「読書

感想文の書き方に不安を抱いている」²⁶⁾点をあげる。本授業実践は、発表内容を「自己と書籍のかかわりについて」とおおまかに規定しており、事前にレポートを課し、記述が苦手な学生のために例もあげた。そのため、話すべき（書くべき）内容が明確であり、書く内容に不安を覚えなかつたのかもしれない。

(iv) 本授業実践に対する心情

本授業実践の感想について、最も多かったのは「面白かった」「楽しかった」という内容である。「初めてビブリオバトルを行なったが、植物の話やサッカーの話、自分の価値観ではからなくなつた等、一人一人にとって本がどのように影響してきたか、について聞くことができてとても面白かった。」「正直ビブリオバトルは苦手なイメージがあつたけれど、やってみると自分のことを話すのは楽しいなど感じた」等のコメントがみられた。「また行ないたい」「教員になってやってみたい」というコメントも多くみられた。

ビブリオバトルを通して、人への興味を持てたという受講生も一定数いる。「本からその人がどのようにして成長してきたのかがよくわかり、相手のことをもっと知ってみたいと思った」等のコメントもみられた。

また、読書欲の高まりについて記述した受講生も一定数いる。「本をあまり読まないので本との出会いで人生が変わる経験をしたことが無い。だから、みんなの話を聞いて本を読むことに興味を持った」等のコメントもみられた。そのほかに、自分を語る大切さを学べたこと、同じ本を読んでも人それぞれの受け取り方が異なること等の気づきもみられた。

(v) 発表後の質疑応答による他者理解

質疑応答について、他者理解をするうえで有効であると、多くの人が感じていた。「他者理解にながる質問を考えるのは難しかつた。だが、こういうところを知りたい、という質問を考えるのは他者に視点を向ける行為であるため、他者理解に強く結びつくと思った」「なるべく本とその人を関連付けて質問するように心がけたため、回答にその人が反映されていたと感じた」というように、受講生は他者理解を意識して質問を行なっていた。質

問を苦手とする人もいたが、本授業実践ではワークシートに質問を書く時間を設けたため、質問の時間にはききたい内容は準備できており、全員が質問を行なっていた。

②受講生がうまくいかなかったと感じた点と改善に向けて

1つに、発表のスキルである。早口になってしまったことや緊張したため、思ったように話ができなかつたと自覚した人もいた。早口になった原因として、内容を詰め込みすぎた点や緊張をあげる人が多い。この課題をふまえたうえで、発表内容の精選や事前準備を行なうことで緊張を緩和できると改善点についても示した。

2つに、構成である。あらすじの分量が多すぎたことや逆に自身の経験に比重を置きすぎたこと等の反省が記された。そのうえで、聞く側にとってわかりやすくかつ興味をひく構成なるよう、改善しようとする態度もみられた。

3つに、時間調整である。5分という発表時間について足りなかつた人もいれば時間を余らせた人もいた。その改善として、事前の準備、例えばリハーサルがあがつた。

(3) Zoom での実施に対する評価

Zoom での実施に対するコメントが一定数みられた。まず、話しにくいという点である。みぶり等の非言語コミュニケーションが、画面でみえにくうことや聞く側の反応が発表者に伝わりにくいう指摘があった。ただし、班によってはメンバーが画面にできるだけ近づいて実施したことで、話しにくいという点を回避していた。

一方で、Zoom の良さをあげた人もいた。「周りの雑音がなかつたので声に集中して耳をかたむけることができた」「みぶりなどのスキルの活用ははずかしかつたが、そのぶんより内容や間の取り方などを工夫したことで、対面のビブリオバトルとは違った良さがある」というコメントもみられた。

Zoom では聞く側の反応が発表者に伝わりにくいう弱点はあるものの、事前にわかっていてれば対応が可能である。今後 Zoom 等双方向のオンラインシステムを用いた授業が小学校から高校に広がる可能性もある。その際に、教員が対面と

Zoom の長所・短所を把握することで、弱点についても可能な限り補えるものと考えられる。

以上、受講生のワークシートより「人間関係形成」をめざして開発した授業の評価と改善点がみえてきた。本授業実践は、自己理解、他者理解に関わる活動を行なう中で、人間関係の形成につなげていくことをめざした。ワークシートのコメントより、事前の課題レポート、班メンバーの役割、質疑応答、ペアワーク及びグループワーク等の活動を通じて、一定の目標は達成できたと考える。

また、本授業実践は「言語活動」を通じて、言語に関わるスキルを伸ばそうとする。ペアワーク時の相手に対するコメントから、発表内容の構成やプレゼンテーションスキル、質問の内容等、言語活動に関わる部分についても評価する記述が多くみられた。

最後に Zoom での実施について、受講生により評価が異なった。本授業実践においては班（人）によって、Zoom の弱点を事前に推測し、発表当日に対応していた。このように、対応によって弱点は補える可能性を指摘できる。よって、対面以外で実施する時は対面とは異なる状況を推測すると同時に、対応も考えて実施する必要がある。

4. 学校における本授業実践の応用の可能性

(1) 本以外の題材を用いて、実施する

本授業実践は、本を題材に人間関係の形成をめざした。ただし、人間関係の形成を目的にするならば、本以外の題材でも行なえる。むしろ、本以外の題材のほうが自己を表現できる人もいるだろう。

本以外の題材の使用やメンバーの特徴によって発表時間の調整ができれば、他校種間や異年齢間でも実行しやすくなる。これまでの自己紹介について「テーマが示されずに自己紹介をすることは難しい」とコメントした受講生もいるように、「好きなもの」「面白いと思っているもの」という発表者の関心にふれるテーマを設けることで、話しやすいと感じる子どももいるだろう。

題材として、映画やドラマ、本や漫画、アニメ、色、動物、スポーツ、芸能人、歌、国、家族等が考えられる。人によって自由に選択できるとよい。大

学生や社会人を対象に試行した際、事前の準備時間はほとんどなかったが、多くの人が戸惑う様子をみせず話し始めた。また、何も指示しなかつたがビブリオバトルの発表者が本を持って語るように、出席者は携帯電話にポスターや国旗等を映し出して話をする様子がみられた。その人が好ましく思っているものを視覚化することで、相手により伝わりやすくなる。小学校から高校まで実施する場合、同様に携帯電話か軽量のタブレットがあれば使用できるとよいし、紙に印刷したものでも代替できる。

(2) テーマを規定することで、特別活動以外の教科目で実施できる

ビブリオバトルでは、「テーマ」や「シバリ」を設定することもあり、「テーマビブリオバトル」とよばれている。この際テーマは、抽象的なキーワードを設定するという²⁷⁾。教科や科目で実施する場合、授業に関連するキーワードを選ぶことで、本授業実践や先行研究が実施した特別活動や国語科以外でも、「言語活動」と関連させた授業の実施が可能になる。

おわりに

本研究の目的は、自己理解・他者理解を通じて、特別活動の教育目標である「人間関係形成」をめざした授業開発にある。授業開発にあたり、「言語活動の充実」及び「主体的・対話的で深い学び」の視点を重視した。これらの点をふまえて、本の紹介ゲームとして実施されているビブリオバトルをベースに、自己について本を用いて紹介（発表）する授業を行なった。なお、コロナ感染症対応のため、Zoomを介して実施した。本授業実践の受講対象は大学生であるが、高校等の学校でも行なえるように学習指導要領をふまえて内容を構成している。公式のビブリオバトルとは異なり、発表当日前のレポート作成や発表後のワークシート記入、ペアワーク、グループワークを含めることで、自己理解と他者理解につなげられるようにした。

受講生のワークシートより、自己理解は事前のレポート、当日の発表、ペアワークの相手からのコ

メントを通じて深められていた人が多かった。他者理解は当日の発表、班メンバーによる司会等の役割、発表に対する質問、ペアワークの相手へのコメント等から深めていた。また、受講生は所属した班について、安心できる雰囲気があったことや困った時にフォローする等、肯定的に評価していた。

Zoomについて、対面時と比べると聞く側の反応がわかりにくいで発表しづらいという意見がある一方で、雑音が聞こえないために集中できるという意見もあった。Zoomの弱点については、前もって予想をして対応した班もあり、対応により弱点を補える可能性を見出せた。

本授業実践について、高校等の学校で実施するにあたり考慮すべき点として 2 点あげたい。1 つは、実施時期である。本授業実践は自己理解に加え、自己開示を伴う。自己開示は、一定の信頼関係があってこそ可能になる。そのため、子どもたちの信頼関係の状況を把握したうえで実施する必要がある。また、どうしても自己開示をしたくない子どもも存在すると思われるため、その場合の対応も事前に考えておく必要があるだろう。2 つに、発表後の質問への回答である。ワークシートに記された質問の中には「読書後に家族との関係は変化したか」「家族を持った時にどんな家族にしたいか」「差別について、自分がしてしまった経験はあるか」「学校生活で命について考えさせられた経験はあるか」等、人によっては答えにくいと考えられる内容もあった。本授業の中で、できるだけ他者理解をふまえた質問と内容と規定したため、人の心情に入り込むような質問も想定できる。学校で実施する場合も同様の質問により、人によっては答えにくかったり、回答に時間を要したりすることも出てくるだろう。そのため、教員は発表前に全ての質問に答える必要はないことを伝えること等も必要になる。

註

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 特別活動編』東京書籍、2019 年、4 頁。
- 2) 林伸一「ビブリオバトルの現状と問題点—知的

- 書評合戦について』『異文化研究』13、2019年、117~118頁。
- 3) 谷口忠大『ビブリオバトル—本を知り人を知る書評ゲーム』文藝春秋、2013年、17頁。
- 4) 筑波大学の知識情報・図書館学類の「入学情報」<https://klis.tsukuba.ac.jp/biblio_battle.html>（最終閲覧 2020年11月23日）
- 5) 現在は、「第四次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」に入っている。
- 6) 林口浩士、大西克実「中学生の主体的・対話的で深い学びに学校図書館を活用した事例と考察」『情報学』16(1)、2019年。
- 7) 太田真理「『国語表現』におけるビブリオバトル導入の試み—総合的な国語表現力涵養のためにー」『東京未来大学研究紀要』11号、2017年。
- 8) 前掲註3)、97頁。
- 9) 同上書、156頁。
- 10) 同上書、16頁。
- 11) 知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト<<http://www.bibliobattle.jp/>>（最終閲覧 2020年11月23日）
- 12) ただし、2020年度前期当初はZoom等の双方指向型授業が行なえず、オンデマンド授業のみであったため、この授業も1~4回まではグループワークやペアワークを実施できなかった。
- 13) 考案者である谷口氏も「レジュメを読み上げるためだけの発表」について禁じたいと述べている（前掲註3)、170頁。）
- 14) 同上書、155頁。
- 15) 前掲註1)。
- 16) 同上書、11頁。
- 17) 同上書、12頁。
- 18) 同上書、12頁。
- 19) 同上書、20頁。
- 20) 同上書、16頁。
- 21) 同上書、17頁。
- 22) 同上書、18頁。
- 23) 同上書、18頁。
- 24) 同上書、48頁。
- 25) ワークシートの項目は、以下の通り。「1. 発表等で気をつけたいこと、向上させたいこと」「2.発表者への質問（他者理解につながるような）」「3.ペアの相手へのコメント」「4.感想」で構成している。なお、1だけは、発表前までに記述してもらうようにした。
- 26) 天野未来、鈴木貴文「『自立した読者』を育む読書感想文指導」『帝京科学大学教育教職研究』第5巻第1号、2019年、25頁。
- 27) 前掲註3)、80頁。